

<b>Title</b>	文明の衝突の時代に（イム教授への応答）
<b>Author(s)</b>	東方, 敬信
<b>Citation</b>	聖学院大学総合研究所紀要, No.57 別冊,2014.3 : 65-69
<b>URL</b>	<a href="http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/detail.php?item_id=5129">http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/detail.php?item_id=5129</a>
<b>Rights</b>	



聖学院学術情報発信システム : SERVE

SEigakuin Repository and academic archiVE

## 文明の衝突の時代に

東方 敬信

一九八九年一月九日にベルリンの壁が崩壊し、一九九一年に七〇年間続いたソ連の社会主義実験が崩壊し、いわゆる東西のイデオロギー紛争が終止符を打った。いつの間にか、資本主義と民主主義の支配する世界になった。だから、日系アメリカ人のフランシス・フクヤマは、一九九二年に『歴史の終わり』という印象深い書物を書きあらわし、「リベラル・デモクラシー」という政治哲学の価値を称揚した。

しかし、このイデオロギーの対立に代わって、新しい歴史のドラマが幕開けした。それが「文明の衝突」である。このことを明瞭にしたのが、サミュエル・ハンティントンの『文明の衝突』、正確に英語を翻訳すると『文明の衝突と世界秩序の再構築』(*The Clash of Civilization and the Remaking of World Order* (Simon & Schuster, 1996))である。私はその書物の最後の章で彼が次のように述べたことに注意したい。「世界の主要宗教——西欧キリスト教、正教会、ヒンドゥー、仏教、イスラム、儒教、道教、ユダヤ教——によつて人類がどれほど分裂しているにせよ、これらの宗教もまた重要な価値観を共有している。……(中略)……あらゆる文明の住民は他の文明の住民と共通している価値観や制度、生活習慣を模索し、それらを拡大しようとするべきなのである」と。ここで、文明の衝突ではなく「文明の共通項」を探ることが大切になってくる。諸文明間の対話のための土俵作りである「共通項の探求」が大切になる。

私は三つの共通項を土俵にしたいと思う。その一つは、「生物学的共通項」。シェークスピアの『ベニスの商人』の台詞に「ユダヤ人には目がないのか」という言葉があり、生物学的共通項を見事に言つてのけた。第二に、教育社会学者メルフォード・スピロは、「どこにおいても、子どもたちは、愛を受け取る存在であり、愛を表現するモチベーションを与える存在である」と言う。未来の「社会形成」であろう。第三番目に女性哲学者マーサ・ヌスバウムの言う「実存的共通項」を上げることができる。どの文明に属していても、私たち人間は「実存的デレンマ」に直面し、すべての人は死に対して折り合いをつけ、また自分の人生を設計しなければならない。

このような共通項を求める旅路は、人間性の倫理へ向かつていく。ここで、神学者ハンス・キュンクが『グローバル・エシックス』を提案していることに注目したい。彼は、すべての人間性の尊重を掲げ、とりわけ聖書の黄金律「だから、人にしてもらいたいのと思うことは何でも、あなたがたも人にしなさい」（新共同訳、マタイによる福音書七章一二節）を人間性に共通した希望として提案している。そこには、「非暴力と生の尊厳への文化」また「連帯と正しい経済秩序への文化」、「寛容と真実の生への文化」さらに「男女の平等の権利とパートナーシップの文化」がある。

しかし、このハンス・キュンクの背後にある注目すべき歴史的事実を指摘したい。彼が「地球倫理なしに、地球の存続なし」と主張した背景には、ドイツの元首相ヘルムート・シュミットや日本の元首相福田赳夫などのシニア政治家たちの会議があった。それは諸宗教の会議も含んだ歴史的事実であった。「すべての人間は、生れながらにして自由であり、かつ、尊厳と権利とについて平等である」という第一条をもつ世界人権宣言が一九四八年十二月一〇日に国連総会で採択されたことは、割と知られているが、その五〇年後一九九八年に五〇周年を記念して、世界の政治家のOBサミットが「人間の責任についての世界宣言」を準備したことはあまり知られていない。アメリカのカーター元大統領など世界の元政治家の集まりであるインターアクション・カウンシルは、一九八三年に日本の福田赳夫元首相が提案して始まり、会議を重ねたが、この「責任宣言」には、シンガポールのリー・クワンユー元首相や宮澤喜一、土井たか子、

加藤寛といった日本の政治に責任をもった人たちの名前も記されている。アドヴァイザーとして神学者ハンス・キュンク、ハーバード大学のトマス・アクスウォーシー、ソウル大学のキム・キョンドンが参加している。署名人には、上記の日本人の他に、タイ元首相アナン・パナラチャン、メキシコ元大統領ミゲル・デラマドリ、元ソ連大統領ゴルバチョフなどがある。この宣言が出される途上で、ハンス・キュンクは、まとめ役として一九九三年に *Yes To A Global Ethics* を編集して、ヴァイツゼッガー元ドイツ大統領やミャンマーのアウン・サン・スー・チー女史の文章を載せたが、日本の仏教学者で僧侶の吉田收氏が一九九七年に日本語訳をだしている。このような歴史における出来事を無視してはならないであろう。今の日本の政治家は健忘症にかかっている。

その宣言の第一条は、「すべての人々は、性、人種、社会的地位、政治的見解、言語、年齢、国籍または宗教に関わらず、すべての人々を人道的に遇する責任を負っている」。第二条「何人も、いかなる形にせよ非人間的な行為に支持を与えてはならず、すべての人は他のすべての人々の尊厳と自尊のために努力する責任を負っている」。この環境問題と宗教間対話をふまえた「責任宣言」の第七条には、「すべての人々は限りなく尊く、無条件に保護されなければならない。動物および自然環境も保護を求めている。すべての人々は、現在生きている人々および将来世代の人々のために、空気、水および土壌を保護する責任を負っている」とある。

聖書の間観で言えば、スチュワードシップ。これは、このかけがえない命の惑星を正しく平和に管理する。私たちは、自分を、育てられ、支えられ、生かされている命のカーペットの一部と理解できる。さらに大切なのは、私たちは生命の頂点に立たせられただけでなく、知性を与え、精神を与え、責任的に生きる存在となること与えたイエス・キリストの父なる神に信仰をもつて応答することである。イエス・キリストは本気で和解と平和に仕える生活を示すために神の国の福音を宣べ伝え十字架における赦しと非暴力的愛のために命を捧げられ、よみがえられた。私は、このイエス・キリストの福音をこの具体的な歴史の中で宣べ伝え、証しすることが具体的な共同体である教会の使命であると考

える。教会は、礼拝において平和と和解を経験する記憶と希望の共同体である。イエス・キリストの救いの出来事とさらに終末の希望に生きる教会は、イザヤ書十一章にある狼が子羊と共に宿る平和と和解のビジョンに生きる。マーティン・ルサー・キング以降に生きる世界の教会は、非暴力的愛が歴史を深みから動かすことを認識している。世界の再構築を求めている文明の衝突の時代にあつて、世界の教会は、様々な領域に平和と和解を携えた人々をディアスポラとして送り出す。その意味で、証しする教会の社会倫理は、グローバル・エシックスである。

一九七〇年四月一三日、昼食をとったばかりのアポロ一三号の宇宙飛行士三人は、地球から二〇万マイル、約三〇〇キロはなれた宇宙で、酸素タンクが破裂するという突発事故に見まわれた。彼らは、深刻な事態のなかで冷静に判断し、軌道を月の裏側をまわるように変更し、着陸せず帰還することにした。そこで思いがけず彼らは、月の地平線から地球が昇ってくるのを見た。白い雲に包まれた明るい青い色をした球体。真つ暗な宇宙を背景に太陽の光りを浴びた美しい宇宙船地球号。彼らがとった写真は、後世に引き継ぐべき財産となった。それ以来、地球がかけがえない脆い存在であることを敏感に感じるようになった。これを私たちは「エコロジカル・センシティブイティ」（生態学的感性）と呼ぶ。

私たちは、かけがえない宇宙船地球号に乗つて、限られた環境のなかで、限られた水の循環と、限られた表面を覆っている空気のなかで生きている。以前の世代が気づかなかつた地球の資源に限界があることを知っている。もし、私たちが炭酸ガスやフロンガスをコントロールし、エネルギー、水、オゾン、ミネラル、緑地などを保護しなければ、もはや生命は維持できなくなる。放射能を三〇万年も出し続ける核廃棄物を出すことを断念しなければ責任がもてない。

分子生物学者であり英国の牧師でもあるピーコック博士は、宇宙で起こってきたことが、人間の科学という冒険のまえで明らかになってきたのはわずか三〇〇〇年の科学革命のさらにわずか最近の三〇年だと言う。銀河系宇宙の地球とい

う惑星でタンパク質の合成が起こり、生命が誕生し、二〇億年かけて知的生命体になった。しかしその途端その知性が宇宙エネルギーの「核」を握り、その破壊力によって自滅するかもしれない。地球をかけがえのないものとして知ったときに、人間という知的生命体は地球を全滅する程の力をもった。これは、逆説である。いつとき科学万能の時代に、宗教は必要と言った。しかし、いまは科学が万能のように発達してきたからこそ、命の質を考える宗教あるいは価値観が必要となった。スチュワードシップは、「受託精神」であり、命をはじめすべての存在を預かっているという感覚である。スチュワードは、庭や広間を見張る番人あるいは庭師や執事のことである。スチュワードは、ある程度任せられた人物である。任せられるというのは、そこに主体性も予想される。創意工夫が求められる。イエス・キリストはたとえて「忠実な思慮深い家令は、いったいだれであろう」（口語訳、ルカによる福音書一二章四二節）と言っている。思慮深いというのは、主体的に責任的な行動ができることである。古代ギリシャの哲学者の多くは、地上の事、物質生活を軽蔑したが、聖書は、この地上を託された大切な「預かりもの」と見る。私たちはまず生かされていることを謙虚に考え、そして命を素晴らしい賜物として感謝し、同時に責任をもってイエス・キリストの福音こそリアリズムだとして和解と平和に生きるのである。